

いの流水俳壇

「当季雑詠」

友草 水月選

沢庵の音も食する今朝の幸

田薦恵美子

(評) 昔から日本人にとっては、お茶漬けには漬物と相場が決まっていた。食事には最も親しい沢庵をカリカリと音をたてて噛むのは至福の時であり、一日の始まりである。音を食するとの表現がうまい。美味しく朝飯を食べている情景がよく分かる。沢庵の名は禅僧の沢庵和尚が考案したことからも、また「たくわえ漬」の訛ったものとも言われている。

私たちは「漬物」「香のもの」と昔から言っていた。日本人の食生活も変わってきているが、私たち年輩者は麦飯と漬物で育ったせいかわいまい漬物は欠かせない。沢庵は米糠と塩加減と重石によってその味が決まると言われている。

○沢庵や家の掟の塩加減

高浜 虚子

亡き妻の椅子に句集と水仙花

間 浩太

(評) 作者は先年奥さんを亡くされた。奥さんが座っていた椅子に句集と水仙の花を供えて報告をしたのである。

奥さんは生前、菜の花まつりのイベントで「菜の花句会」を是友の公民館で実施した際の懇親会でいろいろとお世話してくださり、自分が漬けた漬物を出してくれたことであつた。快活で愛想よくしてくれた当時の姿を思い、漬け物の味を思い出している私である。心より奥さんのご

冥福をお祈りしたい。

○明るさは海よりのもの野水仙

稲畑 灯女

野路菊や里には里の云い伝え

片岡 包女

(評) 野路菊が野道に真白い花を咲かせている。長閑かな里の景色であるが、昔からいろいろの言い伝えが残っている。どんな言い伝えであるかこの句では分からないが、詠む人の想像にまかせている。その言い伝えは昔から人間の生活経験の知恵であり、今も生活の中に生きていのである。それが民話であったり諺である。

「えんこう」「七人みさき」とか「一事が万事」「早起きは三文の得」と昔はよく、古老に聞いたものである。最近では生活の多様化、核家族化でその土地の民話や諺を聞き伝承する機会が減っているのは残念である。野路菊は本県では海岸に多く、物部川以西に自生している。晩秋に真白い花片、花心(蕊)が黄色で華麗さはないが清楚な美しい菊である。

○菊の香やならには古き仏達

松尾 芭蕉

落葉踏む音の歩みも老夫婦

竹崎たかひろ

(評) 木枯らしが吹き始めると、ほとんどの落葉樹は葉を落としはじめ地に積み重なる。掲句はその落葉を踏みつつ散歩している老夫婦の和やかな姿である。落葉を踏み足音もやさしく静かである。若者の元氣よく踏み音は元氣であらう。

踏む音の違いの発見であり繊細な感性と「音の歩み」と言う表現で秀句となった。作者の川柳から俳句への世界に表現が確かになった感じがする一句である。

○落葉踏む音颯々と波郷以後

上田五千石

二句抄

手に残る温み握るや街師走

大川 節弥

過去となる刻の流れや除夜の鐘

刈谷 志津

古曆帰らぬ月日往く水も

森岡 照月

心急ぎ忙しく廻る十二月

小野川町子

好きな本時を忘れて十二月

岡村 嘉夫

生涯を独身貫く木の葉髪

川村 貞子

街路市行ったり来たり師走かな

津田 久美

裏鬼門守り預けし実南天

田薦恵美子

年賀書く過ぎにし日々は走馬灯

竹崎たかひろ

柚子の玉香りと共に友の声

友草 水月

柿朱し雨戸の開かぬ山家かな

水月

成すことのある俵せ日記閉ず

水月

あちこちに見残しの柚子色づきぬ

水月

傍の犬の細目や日向ぼこ

水月

堤防の続く限りの草紅葉

水月

追憶の障子の陰絵コンと鳴く

水月

晩鐘の音なく和していちよう散る

水月

北の間へ一時射し込む冬日かな

水月

時ならず豪雨となりて年つまる

水月

山茶花の散り急ぎたる今朝の雨

水月

名句鑑賞

柚子湯に入るると柚子の香気が湯気とともに立ちのぼる。体を沈めると湯の熱さが体に沁みこんでくる。「無数の傷のあるごとく」、体の傷ではない湯の熱さが沁みることの形容だが心の傷かもしれない。湯の心地よい熱さと、柚子の香りが皮膚を通して心に沁みる。そしてその傷を癒してゆく。柚子湯を心理的に捉えた佳句である。

岡本 眸

水月

次題 「当季雑詠」

締め切り 毎月5日

投句先

教育委員会事務局

いの町1700-11
893-11922

有料広告

(医)慶誠会 高岡内科

院長 高岡和子

いの町新町86 TEL 088-892-0296

禁煙治療も行っています

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00~12:30	○	○	☆	☆	○	○
午後 2:00~6:00	○	○	○	△	○	△

日曜、祝日、木曜と土曜の午後休診

診察医師 ○高岡誠人、高岡和子
☆高岡和子